

## 石巻通信第4号（08年4月23日）

### ☆漁船に乗るとのこと

高成田享

ある魚のことを書こうと思うと、その魚のさまざまな属性とか料理法とかに加えて、実際にどうやってその魚を獲っているのか、知りたくなる。そうなるに漁船に乗って、「現場」を見たくなる。

「春告げ魚」のひとつである「メロウド」と呼ばれる魚が石巻港に揚がりはじめたときに、どうしても、これを獲る船に乗りたくなかった。というのも、メロウド船の舳先から突き出た2本の太い柱がなんとも奇妙で、これを使った「すくい網漁」という漁法に興味を持ったから



だ。法政大学出版局を刊行している「ものと人間の文化史」というシリーズのなかにある『追込漁（おいこみりょう）』という本を読んでもみると、こんなことが書かれていた。

三陸では、「ヨド」とか「メロウド」とか呼ばれるイカナゴの追い込み漁が古くからある。海鳥のウトウやイルカ、オットセイなどが海中のイカナゴの群れを追うと、イカナゴは防御のために群れを固めて海面近くに上がってくる。そういう状態の群れを「エドコ」とか「イケ」とか呼ぶが、このエドコやイケを上空から狙うカモメの様子などから、それをいち早く見つけて、網ですくい獲る。これがすくい網漁だ。

動物に追い込ませて、それをすくい獲るなんて漁法が今もあるのだろうか。すくい網の漁師が多いという石巻のある漁協に連絡して、須田賢一さんという漁師を紹介してもらった。須田さんは快く同乗を認めてくれたが、夕方になると、「波が強いから、明日は無理」という電話がかかってくる。たしかに春の嵐が来て、乗らなくて良かったと思うのだが、翌日

になって、「今朝は休んだのですか」と尋ねると、「いや、わしらは行ったけど」という返事だった。4、5日待って、やっと「しろと」が乗っても大丈夫そうな天候が期待できたのだろう、取材にOKが出た。

4月のある日の午前3時半、石巻市内から車で1時間あまりの給分浜という小さな入り江の港で須田さんと会い、須田さんと長男の一紀さんが操る「第11伊勢丸」という4・9トンの小型漁船に乗り込んだ。久しぶりだというなぎ状態の海を漁船は進み、2時間ほどで仙台湾にある漁場に到着した。どうするのを見ていたら、父は操縦席から、子は舳先から、じっと海をにらんでいる。カモメの動きを見ているのだという。魚探などの道具を使うものだと思っていただけに、ずいぶんと原始的だと驚いた。もっとびっくりしたのは、「こいつらがメロウドを追い込んでくれるんだよ」と言って、須田さんが船縁を指したので、視線をカモメの舞う空から海に移したら、なんとオットセイが数頭、船のすぐ横を泳いでいたことだ。「オットセイのいるところに、メロウドはいる」とも言う。まさに、本に書かれていた通りの漁法ではないか。

漁場をアイドリリングで漂うこと2時間、突然、船が猛スピードでぶきをあげながら突進して、止まった。見渡すと、空だけでなく海面にも数十羽のカモメがぎゃーぎゃーと鳴き声をあげている。このあたりに「イケ」があるのだろう。舳先から体を半分、乗り出して海面をにらんでいた一紀さんが手を振りながら船を操縦する賢一さんに合図を送り、船の方向を微調整。そこで、賢一さんが「しゃー」と声を上げると、するすると油圧で動く2本の棒（アゾ）が海面に差し込まれた。すぐに棒を海面から上げて棒に付いていた網でナロウドをすくい取る。舳先から身を乗り出していた一紀さんが今度はそのままの姿勢で網を引き揚げながら、中に入ったメロウドを網の奥へと追い込む。操縦席から下りてきた須田さんも網を引くのを手伝う。網の中にたっぷりとメロウドが入っているのが、海中がきらきらと光るので船からも見える。最後は網を油圧で船上まで引き揚げ、漁槽にメロウドを流し込むと1回の漁が終わる。

油圧で網を入れたり、引き揚げたりする動力を除けば、まったく昔からの漁法だった。カモメの動きでイケを見つけ、僚船と競争しながら早くイケに向かう。最初に到着した船が最初に網を入れる権利があるというにも昔からのルールだ。海面の色で、イケを見つけて、そこに網の棒を突き刺す。このあたりも、すべて漁師の勘が頼りだ。この日、操業を終える午後2時ごろまでに9回、網を入れたが、空だったのは1回だけだった。漁業無線を聞いていると、「また空だった」といったぼやきが多く流れてくるので、漁協が推薦した賢一さんの腕がいいことがよくわかった。

水揚げのため石巻港に向かう途中で、急に天候が崩れ、激しい雨と風になった。波しぶき

をかぶるので、恐ろしくなったが、この程度は、「しけ」には入らないのだろう。悲しいのは、それこそ漁師が命がけで捕ってきた魚も、ひとたび水揚げされれば、市場原理という生命とはまったく異なる物差しで評価されてしまうことだ。「一生懸命とっても、水族館のイルカのエサだから」と一紀さんは笑っていたが、実際、成魚のイカナゴの市場価値は低く、このあたりのものもほとんどが西日本の養殖場に送られ、ヒラメのエサになるという。「漁師が一匹一匹、命をかけて獲ってきたものだから、エサなどにせず、人間が大事に食べなさい」と言いたい気持ちになった。

この日のメロウドの売値はキロ70円ほど。高級魚になると数千円だから、メロウドは超低級魚ということになる。それでも水揚げは1・7トンで、売り上げは約12万円になった。ここから1回の操業で1万円近くになる燃料代が消え、さらに約2千万円の漁船への投資の回収をすることになる。1日の収入としては悪くないが、いつも操業できるとは限らないし、豊漁もあれば不漁のときもある。漁期も数カ月などと考えると、後継者がいないのもわかる。須田さん親子のような親子船は珍しい例だという。一紀さんは宮城水産高校の出身で、学校を取材したこともあるが、漁業者の子どもが漁業の後継者となるのは少ないし、なるときも養殖など栽培漁業が多いという。より安定的な職業を求めるのは当然のことだろう。

経済水域の大きさでいえば世界で6番目の広さを持ち、南北に延びる日本列島の脇を暖流と寒流とが流れる水域は、魚種も豊富だ。それなのに、漁業の水揚げ高は長期的には凋落傾向にあり、後継者も少なくなっている。その最大の原因は、乱獲だ。200カイリの経済水域が設定されたあと、廃業しきれなかった北洋のトロール船が日本の沿岸、沖合漁業に入らざるを得なかったなどの理由はあるが、世界有数の水産資源を管理しきれなかった日本の水産行政は失敗の歴史というしかない。

「水産は地方分権で、都道府県に漁業権の管理を任せているから、国は手が出せない」などと水産庁の役人は弁明するが、欧州のように水産資源を国民の資産として管理していく発想と決意があれば、日本の漁業には再生のチャンスは十分にあると思う。世界的に水産資源への見直しが始まっているのに、それが漁業の現場にちっとも伝わってこないのは、とても残念なことだ。

「わかっちゃいるけど、やめられない」と、漁業関係者の誰もが認める乱獲をなぜとめられないのか、どうすればとまるのか、おいおい論を勧めようと思うが、そこに説得力を持たせるには、現場をもっと知ることが必要だろう。これからの2週間で、定置網漁と調査捕鯨への乗船予定が入っている。あらためて、乗船記を紹介しようと思う。